

## 「対話」を取り入れた物語の授業

—— 立松和平『海の命』 ——

岡 卓志

はじめに

六年生の教材に、立松和平『海の命』<sup>(1)</sup>がある。

あらすじは以下の通りである。

太一の父は、大きなクエの漁で命を落とす。太一は、中学卒業後、釣りの名人である与吉じいさに弟子入りをして、村一番の漁師までに成長をする。ある日、巨大なクエ(瀬の主)を海の底で見つけ仕留めようとする。しかし、「お父。ここにおられたのですか。」と言い、もりを打たずに海を後にする。巨大なクエにもりを打たなかったことは生涯、誰にも話さなかった。

「なぜ、太一がクエを捕らなかつたのか」が学習の際に問題となる。『海の命』に関する論文・実践記録には、さまざまな解釈がある<sup>(2)</sup>。

ここで、今までの国語科ではあまり考えられなかったと思われる発想をする。

「なぜクエを捕らなかつた」という答えは、太一本人でないと分からない。しかし、太一は『海の命』という虚構の中で生きる人物であるため、これ以上語ることはない。

ところが、太一の人物像を分析し「太一」の役として語ることはできる。

そこで、「読者」が「登場人物」となって「対話」をした後、手記を書かせる授業を考えた<sup>(3)</sup>。

本論では、その実践と子ども解釈を見ていく。

平成二十二年、安来市内の小学五・六年生(五年生・九名、六年生・八名)十七名に実践した記録である<sup>(4)</sup>。

## 1 対話の場面を設定する

まず、対話の題材を三つ設定した。

①与吉じいさに弟子入りをお願いするとき「太一」は、何を言ったか。

②「与吉じいさ」が、最期に言い残すなら「太一」に何を言うか。

③「太一」はなぜ、クエを殺さなかったのか。

この三つの題材は、『海の命』を考えていくためのポイントになると考えた。まず、③については、初発の感想でも一番考えたい問題としてあがったものである。①は、父の死やクエ（瀬の主）をどのようにとらえているかを考えるために設定した。②は、太一に大きな影響を与えている与吉じいさの視点から、太一の成長を評価するために設定した。

## 2 太一・与吉じいさの人物像を分析する

### ―プロファイルシートの作成―

#### (1) 「プロファイルシート」作成のためのてびき

「太一」や「与吉じいさ」らしく語るために、登場人物の分析してから対話を行うことにした。そこで、分析するための「プロファイルシート」を作成させた。「プロファイルシート作成のてびき」を示す。

### Ⅰ 『海の命』学習のてびき

#### Ⅰ 「太一」「与吉じいさ」プロファイルシート

・太一・与吉じいさのそれぞれの性格診断（プロファイルシート）を作る。

・登場人物の性格（自分が考えた）を書く。

その際、根拠となった文章・表現、ページを書き出し、わけも書く。

・最低でも三つ。五つあるといい。

・三つ五つみつけたら、最後の欄に自分で分析した登場人物の性格を書く。

○このプロファイルシートが、今後の学習を決めるのできちんと書く。

(2) 子どもが作成したプロフィールシート

「てびき」をもとにC1が作成した「プロフィールシート」をあげる。

「太一のプロファイルシート」

	太一の性格	根拠となる本文・理由
1	子どものころから漁師に なりたがっていた	「ぼくは漁師になる。おとうといっしょに海に出るんだ。」と書いて、ぼくは漁師になるというところから
2	海の表情がすき	「季節や時間の流れとともに変わる海のどんな表情でも太一は好きだ。」と書いてあるから
3	やさしい	「大魚はこの海の命だと思えた。」と書いてあるから

太一は〇〇だよ  
子どものころから漁師になっていて海の表情がすきで優しい人

「与吉じいさのプロファイルシート」

	与吉じいさの性格	根拠となる本文・理由
1	年をとっている	「わしも年じゃ。ずいぶん魚をとってきたが、もう魚を自然に遊ばせてやりたくなくなる。」と言っているから
2	よくばりじゃない	「毎日タイを二十匹とると、もう道具をかたづけたい」と書いているから
3	漁が上手	「毎日タイを二十匹とると」と書いていて、タイを二十匹もとっているから

与吉じいさは〇〇だよ  
年をとっているけど、漁が上手で、でもよくばりじゃない人

C1は、太一を「子どものころから漁師になりたがっていて海の表情がすきで優しい人」、与吉じいさを「年をとっているけど、漁が上手で、でもよくばりじゃない人」と評価している。

もちろん、これは子どもによって評価が異なる。

他の子どもの「プロフィールシート」より

○太一について

(C2) がんばっている

・「作業はほとんど太一がやるようになっていた」太一は与吉じいさの分もやっている

(C3) 冷静

・興奮していたが太一は冷静だった

○与吉じいさについて

(C4) 与吉じいさはきびしい人だ

・太一がつり糸をなかなかにぎらせてもらえなかったから。

(C5) よくみている

・太一はなかなかつり糸をにぎらせてもらえなかった。あとから認めているから。

C4とC5が、「なかなかつり糸をにぎらせてもらえなかった」と同様なところを引用(根拠)しているが、それぞれ「きびしい人」「よくみている」と与吉じいさの評価が異なっている。

この時点の分析は個人作業である。したがって、読みの深いものから浅いものなど様々である。より深い読みにするためには、子ども同士で考えを吟味する作業が必要になってくる。吟味によって「きびしい人」と「よくみている」を融合させると与吉じいさの人物像に深みが出てくる。

吟味の場として、本授業では少人数による「対話」を行った。

### 3 登場人物と対話をする①

—「太一」となって「与吉じいさ」に

弟子入りをお願いする—

#### (1) 対話をするための「てびき」

対話を行う際にも「学習のてびき」を配布し、子どもたちが自力で学習ができるようにした。

#### 『海の命』学習のてびき

#### Ⅱ 与吉じいさに弟子入りをお願いするとき

太一は何を言ったか

○「太一」が弟子入りするとき「言いそうな言葉を考える。」

参考資料

・『海の命』本文・「太一のプロフィールシート」

○表現、言い方を考える。

・太一「年をとったのなら、ぼくをつねの代わりに使ってくれ」など  
・与吉じいさ「わしも年じゃ。ずいぶん魚をとってきたが、もう魚を海に、自然に遊ばせてやりたくなっとなる。」

・「無理やり与吉じいさの弟子になったのだ」

・「与吉じいさ」をお願い↓話し言葉

・太一が何歳なのか。その年らしい言い方。

・なぜ与吉じいさなのか。

・父のこと、クエのことはどこまで話すか・・・。

○太一がお願いするとき「言いそうなことを付せん」に書く。

・考えの元となった根拠（ページ、行）・理由を簡単に付せんのすみ書く。

○二人一組↓四人一組↓全体

・付せんを見ながら「与吉じいさ」役の人に聞いてもらう。

○言ったことを「太一のお願いの文章」として書く。

・「与吉じいさ」役から言われたことを参考に書き加え、自分の意見としてもよい。

対話をして友達を考えや意見で参考になったら、取り入れてもよいことにした。これが自分と友達の考えの吟味になると考えたからである。

(2) メモの例と実際の対話・文章

まず、C1が初めに考えたメモをあげる。

C1が初めに考えたメモ

- ① お願いがあるんだぼくを弟子にしてください。
- ② 与吉じいさは上手なので尊敬している。だからぼくを弟子にしてください。
- ③ ぼくはおとうと海に出たかった。おとうはぼくのあこがれでおとうのようなもぐり漁師になりたいんだ。
- ④ おとうのようなもぐり漁師になってあの大物クエをこの手でつかまえたいんだ。
- ⑤ ぼくを村一番の漁師に育ててください。
- ⑥ お願いだ。ぼくを弟子にしてください。
- ⑦ 「年をとったのならぼくをつえ代わりに使ってください」
- ⑧ なにがなんでも、もぐり漁師になりたいんだ。

(※①～⑧は筆者)

③⑧はC1の「プロファイルシート」の「子どものころから漁師になりたがっていた」をふまえたようである。

次に、C1とC3の対話の記録をあげる。

C3 (「太一」) がC1 (「与吉じいさ」) にお願

C3 (太一) 与吉じいさ。弟子にしてください。

C1 (与吉) 何でじゃ。

C3 (太一) ぼくにとつて、じいさは小さい時から  
の知り合いだから。

C1 (与吉) わしは、もう魚を自然に遊ばせたくな  
っている。

C3 (太一) 年をとったのならぼくをつえ代わり  
に使ってください。なにがなんでも、もぐり  
漁師になりたいんだ。(以下略)

以上のような対話を相手をかえ四回以上した。

次に、C1が対話しながら書き留めたメモをあげる。

C1がもらった考え・意見のメモ

- ⑨ (与吉じいさは) 小さいころからの知り合いだから。
- ⑩ (与吉じいさは) ぼくにとつて村一番の漁師だから。
- ⑪ どれだけ大きな魚をとつてきても、じまんしないおとうのようになりたくないから。
- ⑫ 父をやぶったクエの強さを調べてみたいんです。
- ⑬ 少しの間でいいから弟子にしてください、どんなことでもたえてみせるから。
- ⑭ 殺すんじゃないくてクエの強さをためてみたいから。

ら。  
(※⑨～⑭は筆者)

⑨「(与吉じいさは) 小さいころからの知り合いだから」は、『海の命』の本文にない。C1にとつて、思いつかなかつた情報であつたと予想される。対話は、吟味の場合として有効だつたことがうかがえる。

対話後、このメモを元に太一の「弟子入りのお願いの文章」を書かせた。

なお、子どもたちは、ここまで「太一」となつて「話すという作文」を「対話」を通して何回もしている。文章に起こす際には、どの子どもすぐ書き始めることができ

た。  
C1が書いた「弟子入りのお願いの文章」をあげる。

### C1の「弟子入りのお願いの文章」

与吉じいさ、お願いがあるんだ。ぼくを弟子にしてくれ。与吉じいさは小さい時から知つていて、漁が上手だから尊敬している。ぼくにとつては、与吉じいさは村一番の漁師なんだ。

ぼくはおとうといっしょに海に出たかつた。おとうはぼくのあこがれで、おとうのようなもぐり漁師になりたんだ。おとうはどれだけ大きい魚をとつてきても「海のめぐみだからな。」と言つてじまんしなかつた。だから、ぼくはおとうのようなもぐり漁師になつて、あのおとうをやぶつたクエの強さのためにしてみた

いんだ。少しの間でもいいから弟子にしてくれ。どんな大変なことでもたえてみせる。だから、ぼくを村一番の漁師にしてくれ。お願いだから、ぼくをどうか弟子にしてくれ。たのむ。

(※傍線・波線・番号は筆者)

「文章」と二つの「メモ」の丸数字と傍線(C1が初めに考えた内容)・波線(他の子ども)の考えを記録したメモ)は対応させている。

C1は自分の考えと友達のを吟味し、取捨選択して「弟子入りのお願いの文章」を書いている。

例えば、与吉じいさを師匠として選んだ理由として、最初のメモには「与吉じいさは上手なので尊敬」(②)としている。ところが「弟子入りのお願いの文章」には「小さいころからの知り合い」(⑨)、「ぼくにとつて村一番の漁師だから」(⑩)を取り入れている。このように⑨⑩を入れると、なぜ「与吉じいさ」を師匠として選んだのか説得力が増す。

クエをつかまえることについては、最初のメモでは「おとうのようなもぐり漁師になつてあの大物クエをこの手でつかまえない」(④)としていた。しかし、「殺すんじゃないくてクエの強さのためにしてみたから」(⑭)を参考にし、「お願いの文章」では「あのおとうをやぶつたクエの強さのためにしてみたんだ」と⑭の表現を微妙に変化させている。ここで、C1が「殺すんじ

やなくて」を削除しているところに意味がある。「殺すんじゃないくて」を言うときエに仇を討つ目的で弟子入りするのではないというニュアンスが生じる。しかし、「殺すんじゃないくて」を削除すると、「仇討ちをしないとは言っていない」という曖昧な表現になる。

実は、C1は「太一はクエに仇討ちをしたいと思っ  
ている」と解釈をしている。「与吉じいさ」に悟られない  
ために巧妙に削除したと考えられる⑤。

以上のように、対話をする<sup>④</sup>ことで、自分の考えたもの  
と人からもらった考え(情報)を吟味ができ「太一」と  
いう人物像をふくらませることができた。

### (3) 他の子どもによる「弟子入りのお願いの文章」

小グループで対話するとグループ内の子どもの解釈  
がほとんど同じ内容になると思われるが、以下の文章を  
見ると、その心配はないと考える。

#### C5の「お願いの文章」

おれを弟子にしてくれ。おれはつりをして魚をとれ  
るようになったら、もぐり漁師もして、少しでもお父  
に近づきたいんだ。だから、おれをつえのように使っ  
てくれ。手伝いは何でもするよ。だから少しでも技術  
を教えてください。お父のつれなかつた主をつりたいんだ。  
少しでもお父みたいな漁師になりたいんだ。

C1の「文章」と比較をしてみる。C1が、「おとう  
をやぶったクエの強さをためてみたい」としているの  
に対して、C5は「少しでもお父に近づきたい」「少し  
でもおとうみたいな漁師になる」としている。父の仇討  
ちというよりも、クエを捕って「あこがれの父親に近づ  
く・抜く」ことが目的であるとしている。クエに対する  
思いが少し異なる。  
なお、「つりをして魚をとれるようになったら、もぐ  
り漁師もして」と述べている。これは与吉じいさが「つ  
り」の漁師で、父が「もぐり」漁師であることの違いを  
埋めるための言葉だと考えられる。

#### 4 登場人物と対話をする②

— 「与吉じいさ最期の言葉」 —

#### (1) 「最期の言葉」までの学習の流れ

次に「与吉じいさ」となった学習を見ていく。

「与吉じいさ」が死んだ後、「太一」に成長ぶりを語  
るといふ対話を設定した。ここで「最期」としたのは  
「遺言」のように大切な内容ということにしたかったか  
らである。

学習の手順は「太一の弟子入りのお願いの文章」とほ

ぼ同じである（「てびき」省略）。聞き手は「太一」とした。対話後「与吉じいさの最期の言葉」の文章を書かせた。

## (2) 対話後の「与吉じいさ最期の言葉」

「最初に考えたメモ」と対話後の「友達からもらった意見のメモ」を吟味して「与吉じいさの言葉」を書いていく。

「対話」の成果である文章を中心に見ていく。

### 「与吉じいさ最期の言葉」

#### C1の「最期の言葉」

太一、お前は、弟子になって成長したのお。弟子になりたての時より漁に行く態度が変わって真けんになっておった。いつも、つり針にえさを付けて、上がってきた魚から釣り針を外すだけだったけど、もんくを言わんでしつかりやつとたの。でも、そんな小さい仕事でもいいかげんにしないのが本当の漁師っていうもんなんだ。お前はそれをやってのけた。だからお前はもう村一番の漁師なんだ。千びきに一ひきはお前が決める。父をやぶったクエをとるかこのままイサキやタイなどをとるのは自由だ。海を大切に生きろよ。でも、太一ならだいたいようぶだろう。太一は海のどんな表情でも好きだったからなあ。ここはお前の海

だ。次はお前がこの海をつぐんだ。今度は、お前が弟子をとることになったら、その弟子に「千びきに一びき」の事を話してやってほしい。船に乗らなくなっても魚を届けてくれてありがとな。これからもがんばれよ。

#### C3の「最期の言葉」

おまえは村一番のりようしだ。あのころのお前は小さいしごとだけだったけど、よくやっていたな。クエとたたかうのかほかの魚をとるのかは、お前の自由だ。もしほかの魚をとるなら千びきにいつびきをまもって海を大切にしろ。お前もずいぶん成長した。あのころのお前はクエのことしか考えていなかったが、今はほかの魚のことも気にしたいい弟子だ。お前はしゅぎようして一人前のりようしになったんだ。でも、クエをとろうとして父のようになるのが心配じゃ。あと、船に乗らなくなっても魚をどどけてくれてありがとう。

#### C4の「最期の言葉」

わしはもうだめじゃ。その代わり、この海をまかせろ。ここはお前の海じゃ。お前はわしの一歩の弟子じゃ。お前を弟子にしてよかった。お前はもう村一番のもぐり漁師じゃ。わしが死んでも漁を続けるのじゃぞ。

だが、千匹に一匹を心がけよ。そうすれば、一匹だけでも、毎日一匹ずつとれば、生きていける。クエを

とりたければ、しゆ行をしる。あのクエは強いから、わしはお前が心配じゃ。でも、かたきをとりたいのならしゆ行をしていけ。息を長くもたせたりおよぎの練習をしたりしておけ。そうすれば、あのクエをとれる。船は、お前にやろう。この船を使って漁をしる。決して欲ばるでないぞ。  
(※傍線は筆者)

いずれも「最期の言葉」らしく「太一」に大切なことを伝えようとしている。「太一」が漁師として成長をしたということ、ほぼ共通している。

しかし、瀬の主(クエ)を捕ることについてや「千びきに一びき」のとらえ方にはそれぞれ違いがある。

C1は「父をやぶったクエをとるかこのままイサキやタイなどをとるのかは自由だ」というように、「太一」の意志に任せている。また、「太一ならだじようぶだろう」と「太一」を全面的に信頼をしている。「千びきに一びき」については、「父をやぶったクエ」と他の魚とを同等に見なしている。先に述べたように、C1は「太一が仇討ちをしようとしている」と解釈をしている。「太一」の人物評価が「与吉じいさ」の人物評価にも影響していると考えられる。

C3は「クエとたたかうのかほかの魚をとるのかは、お前の自由だ」とし、C1と同様である。しかし、「ほかの魚をとるなら千びきにいつびきをまもって海を大切にしろ」と、「クエ」と「ほかの魚」を同等に扱って

ない。「父のようになるのが心配じゃ」から、ほかの魚では命を落とすことはないが「クエ」は生命を脅かす特別な存在という解釈である。特徴的なのは「あのころのお前はクエのことしか考えていなかったが、今はほかの魚のことも気にしたいいい弟子だ」として、仇を討つ目的だったものが、与吉じいさの指導のもと変化をした。つまり、与吉じいさの在命中に、太一は変わったと解釈しているところである。「太一」の成長と共に「与吉じいさ」のすごさを示したものになっている。

C4の「与吉じいさ」も、C3のように「太一」の漁師の力量を認めつつも、クエの強さを心配している。心配だけでなく「息を長くもたせたりおよぎの練習」をするようにと具体的な指示を出している。はっきりとクエをとることを認めている。

他の子どもの文章を見ても、クエを捕ることに対して与吉じいさが真つ向から反対をしているものはなかった。

## 5 登場人物と対話をする③

### — 太一の記者会見 —

#### (1) 「太一の記者会見」までの学習の流れ

「どうして、クエを捕らなかつたのか」という問題に入る。

「太一」が特別に語るということで「太一の記者会見」を設定した。インタビュアーは新聞・テレビなどの「記者」にした。

これまでの学習のように、二人一組、四人一組の対話をした。そして、今回は代表四人が「太一」役、それ以外の子どもが「記者」として対話をした。（ここでも「学習のてびき」を配布したが、「太一の弟子入り」とほぼ同じ内容なので省略）

## (2) 「太一の記者会見Ⅰ」

— どうしてクエを殺さなかったのか —

以下、「太一の記者会見」の抜粋をあげる。

初めにどうしてクエを殺さなかったのか質問をした。

### 太一の記者会見Ⅰ

太一① クエを捕らなくても太一は父をこえられる思  
ったからです。

T では、太一②さんどうぞ。

太一② えっと、恐かったし。えっと、雰囲気がちよ  
っと父にちよっと似ていたからです。

T では、太一③さんどうぞ。

太一③ クエが、父に思えたからです。

T なるほど、では、太一④さんどうぞ。

太一④ えっと、父を殺したクエですし、しかも、な

んかずつと動かないので自分に殺されたがて  
いるのかと思って、ちよつと気が引けまし  
た。クエを見つけた場所は、元々おとうが殺  
されたところですし、たぶん、おとうの身代  
わりじゃないかと思つたんです。

「太一②」が「恐かった」という発言をしている。こ  
の「恐かった」と解釈している子どもが後の「太一の語  
り」を見ると多くいた。このことは後ほど考える。

## (3) 「太一の記者会見Ⅱ」

— 生涯話さなかったことについて —

### 太一の記者会見Ⅱ

C6 全員の人に聞きますが、なぜ生涯話さなかつ  
たんですか。

太一④ えっと、たぶん村の人たちは、お父さんのか  
たきを取つたんじゃないのみたいなこと言う  
と思うから。なんか、自分が殺せなかったの  
は、クエがお父さんだと思えたからで、別に  
殺さなかったわけではないので、まあ、そん  
なに話すこともないだろうと思つたからで  
す。

C7 言にくいということですか。

太一④ あの、言にくいというよりも、殺してもな

いのにわざわざ村の人たちに言う必要はないということですよ。

太一① もしも、このことを言ったら、村一番の漁師であり続けなかったと思っただからです。

太一② もし誰かに言ったら、誰かが取りに行くかもしれないから、危ないと思って。言わなかった。

C7 じゃあ、なぜ危ないと思っただんですか。

太一② えっと、父でさえとれないのに、他の人がとれるわけないと思っただから。太一③さんは、どうして言わなかったんですか。

太一③ えっと、みんなに言うのと、「せっかくいいチャンスだったのに」って言われて、もう、いろんな人が言うかもしれないし、けんかになっちゃうかもしれないし。

太一② 何でけんかになるんですか。

太一③ いいチャンスが、大きなクエを捕るいいチャンスだったのに「いい漁師になれない」と言われるから。

「太一④」は、クエがおとうに思えたので、クエが殺せなかった。人に言う必要がないから話さなかったとしている。

「太一②」も話さないとしているが、「太一④」と理由が異なる。自分がかまえなかったと言えば、村の誰

かがクエを取りにいき、父のような悲劇を再び繰り返すかもしれないと心配をしている。

一方、「太一①」と「太一③」は「漁師としてのプライド」の問題としている。「太一①」は、「村一番の漁師」であるということに傷がつくとしている。「太一③」は「いろんな人から」批判されるので「いい漁師になれない」としている。

後に書かせた「太一の語り」の文を見るとプライドに関わる解釈をしている子どもが多くいた。これも後ほど考える。

#### (4) 「太一の記者会見」Ⅲ

—与吉じいさについて—

与吉じいさのことについての話題になった。

#### 太一の記者会見Ⅲ

太一② 海で生きていた与吉じいさが、海で生きていたから、海で生きていて死んだから、海に帰ったという表現をしました。

太一④ 与吉じいさは、好きな海に、海で仕事をして先生、(ふせんに)書いてないこと言ってもいい(Tどうぞ)。続けて生きたので、海で死んだというより、海に帰ったと言う方がいいと思っただからです。

「太一②」と「太一④」は、好きな海で生きて死んだから、海に帰ったとしている。ここから以下のように考えられる。与吉じいさが死んだとき太一が「海に帰った」と考えたのならば、海で生きて死んだ「父」も「海に帰った」ということになる。実際、このように考えた子どもが多かった。

この解釈が「太一がなぜクエを捕らなかったのか」を考えていく上で重要になってくる。

#### (5) 「太一の記者会見」Ⅳ

— どうして、クエを捕らなかったのか —

最後に、どうしてクエを殺さなかったのかに話題が移った。

#### 太一の記者会見Ⅳ

C 8 もし、とっていたらどうなると思いましたか。

太一① クエが、えっと、はじめてクエをとったのならば・・・よろこんだ。

太一② もしとったら、父を超えられるのでよろこぶし、仇討ちという。仇討ちという形で終わってしまうと思います。

T 終わってしまう？

太一② 終わってしまいます。

T それは、終わってしまったっていいということ。

それとも、あまりうれしくないなという感じですか。

太一② どうかな、よくわからない。

太一③ とつたら。あがつたら。すぐ泣いてしまうかもしれない。

C 9 泣いてしまいますか。

太一③ 仇討ちはできるけど、あがつて、ふつと思うと、父を殺してしまって、それでなんか。なんか。

T ああ、仇討ちして、父を殺してしまって、なんか泣いてしまう。

太一④ そもそも私が、とらなかったのは、クエが、父のようにおもえたので。もし、とつた場合には、クエを父と思っていないことになる。すぐとつたら仇討ちをとってしまったということだけで終わってしまう。

C 8の「もし、とっていたらどうなると思いましたか」と仮定の質問を登場人物にできるのも「対話」の特徴である。

「太一①」は、ただ「よろこんだ」としている。「太一②」は、クエを殺すことで父を超えられるが、「仇討ちという形で終わってしまう」と述べている。しかし、「終わってしまう」を詳しく説明ができない。

「太一③」は「仇討ちはできるけど、あがつて、ふつ

と思うと、父を殺してしまつて」「泣いてしまふかもしれない」とし、同様に「太一④」は「とつた場合には、クエを父と思つていないことになる」と述べている。クエと父を重ね合わせている。

このように、解釈の深い浅いの違いはあるが、対話を通じて四人がそれぞれの考えを述べている。

ここで「記者会見」の解釈をまとめておく。

「太一①」は、クエを捕らなくても父はこえられるが。とらなかつたことを人に話すと村一番の漁師でなくなる。クエが捕れたらうれしい。プライドにこだわつた「太一」とも言える。

「太一②」は、クエが父に似ていたために捕らなかつた。また、こわかつた。もし捕つていたら、父を超えられるのでよろこぶがただの仇討ちで終わつてしまふ。クエを捕まえなかつたことを言わなかつたのは、父と同じ惨劇を繰り返さないため。

「太一③」は、クエを父と見ているので、父を殺してしまつたと思つて泣いてしまふ。とらなかつたことを言わなかつたのは、いい漁師になれないと言われるから。

「太一④」は、クエを父と見ている。したがつて、殺してしまつたらクエを父と思つていないことになる。殺さなかつたことを言わなかつたのは、言う必要がないと考えたから。

(6) 「太一がはじめて語る」を文章にする

最後に「太一がはじめて語る」という文章を書かせた。

太一がはじめて語る

C1の「太一」

漁師になる事は、大変だろうけどあの父をやぶつたクエをつかまえるためにがんばろうと思つた。与吉じいさから学んだのは、小さいごともしっかりすることと千びきに一びきの事です。殺さなかつたのは、父が死んだ瀬だつたし、クエが父の身がわりだと思えたからですし、もし殺していたらぼくは父を殺したように思うと思つたからです。瀬の主の事は、父をやぶつたし、海の命だと思えました。与吉じいさが海に帰つたという事は、漁師が死ぬという事だと思ひます。どうして、与吉じいさが帰つたのは太一はもう立派な漁師だと思つたからだと思ひます。家族の事は、父は死んで母はまだいます。父はやさしいもぐり漁師で、母はぼくが死んだ瀬の主に行く事を心配していました。海の様子は、棒になつて差しこんだ光が波の動きにつれかがやきながら交差していました。生涯はなさなかつたのは、村一番の漁師なのにとらなかつたので情けないと思つたし、漁師でいられないと思つたからでした。

#### C4の「太一」

なぜ殺さなかったのか？

ぼくは、あの太一がお父さんに見えたんです。少しも動かなかったので、あのクエが自分に殺されたがっていると思えました。最初は、ぼくのことをうかがっていると思えました。でも、年月もたったので年をとったのだと思えました。もし、太一が、クエをとっていたらクエをお父と思っていなかったことだと思っただけで、ただの復しゅうになる。おとうを殺したクエなので（父のように殺されると思って）こわかった。最初におとうの死んだ瀬にもぐった時は、壮大な音楽をきいているようで、お父がむかえてくれていると思った。ぼくは、お父がクエににていると思っただけで殺せなかったです。生がい話さなかったのは、クエをとっていないのに、いう必要はないと思っただけです。

(※傍線は筆者)

C1は、漁師になる動機を「あの父をやぶったクエをつかまえるため」としている。C1の「太一」は「仇討ち」を念頭に置いている。しかし、殺さなかったのは「父が死んだ瀬だったし、クエが父の身がわりだと思えた」「殺していたらぼくは父を殺したように思う」からであるとしている。「記者会見」にあった「海に帰る」に影響をうけたものと考えられる。

ところが、クエをとらななかったことを話さなかったの

は、「記者会見」の「太一①」のように「村一番の漁師なのにとらなかつたので情けない」とプライドの問題としている。

本授業ではこのように解釈する子どもが多かった。これは、『海の命』本文中の「この魚をとらなければ、本当の一人前の漁師にはなれないのだと、太一は泣きそうになりながら思う」をふまえた解釈ではないかと考えられる。

C4も、基本的にはC1と同様に「クエをとっていたらクエをお父と思っていない」としている。しかし、殺さなかった理由としては、父のように殺されるのが「こわかった」としている。

「恐かった」という理由をあげている子どもも多かった。この物語は父の死、与吉じいさの死など、死が根底にある。クエの漁と戦って死ぬのがこわかったと、子どもの本音が出たと言っているだろう。

なお、C4の解釈で特徴的なのは、瀬にもぐって壮大な音楽を聞いているような感じだったのを「お父がむえてくれていると思っただけ」と父と関連づけているところである。「父が死んだ瀬」「海に帰る」ということをふまえたものである。

以上のように、「太一」として対話し、子どもなりの考えを書いている。

## 6 授業を終えて

この学習は、『海の命』という「資料」を元に「対話」をしながら、「自分の考えを説得力をもつて説明する」という学習になっていたように思う。そのため、子どもによって解釈の違いが現れた。例えば、「どうしてクエを捕らなかつたのか」の「記者会見」や「文章」などを見ると子どもによってバラバラである。しかし、バラバラではあるが、それぞれがある程度の説得力をもっていた。

子ども一人一人が自分なりの解釈を作り上げることができた点で「対話」が読解指導に有効だったと考える。一方で、(私の解釈になるが)村一番になつたほどの太一が、はたして「恐い」やプライドにこだわつたのかという疑問がある。吟味の間「対話」の中で「本当に恐いと思つたのか」「村一番にこだわつたのか」ともつとつっこんだ「対話」ができるように指導をしなければならなかつたと思つている。

### おわりに

この授業は国語科の領域でいえば「読む」である。子どもたちは、いろいろな観点で読み解いている。また、対話や作文を導入したことで「話す・聞く」「書く」の

領域も含んでいる。

これは、私が提案した「読む」ことに対する五つの提案「必要な情報をみつける」「根拠・理由・意見の三点セット」「討論・対話の必要性」「批判的な読み・評価的な読み」「読書量を増やす」<sup>(6)</sup>をすべて組み込んだ授業と考えている。

特に、本実践では「批判的な読み・評価的な読み」を工夫した。プロファイルシートや人物評価を吟味することなどである。

登場人物の気持ちを考える物語・文学の学習はこれまで効果を上げてきた。今後にも必要な学習方法だと思う。しかし、これだけでなく「批判的な読み・評価的な読み」を取り入れた授業を今後も展開していかなければならないと考える。

注(1) 『海のいのち』(1982)は、ポプラ社から絵本として出版された。実践を行った当時の国語教科書には、光村図書『海の命』、東京書籍『海のいのち』として採用されていた。本実践では光村図書を使用したので『海の命』と表記する。

(2) 富安慎吾「文学教材における読みの可能性についての検討——立松和平『海のいのち』/『海の命』の場合——」(『島根大学教育学部紀要第44巻別冊』2011・P33～54)。

富安氏は、多くの論文や実践の解釈を精査し、太一的心情の変化は大きく二つあるとしている。「瀬の主を仇とと

らえる視点↓瀬の主を殺さない・殺せない思い」と「瀬の主を仇としてとらえる視点をもっていない↓瀬の主を殺さない・殺せない思い」である。さらに、この二つには「読みのライン」が複数あることを指摘している。本実践のように子どもによつて異なる解釈が存在する場合の分析に参考となった。また、本論ではふれなかったが、本学習の終了後、子どもに「読みのライン」を示した。子ども自身ができるような読み方をしているのかふりかえるものさしとして有効であった。

(3) 鴨志田新一「『対話』と『気づき』の文学教材指導」(『月刊国語教育』、東京法令出版、2003・6)を参考にした。

(4) 実践した学級は、五年、六年の単式学級である。次年度に五・六年複式学級になるため、その予行として合同で行った。

(5) 注(2)の「読みのライン」で分析をさせてわかった。

(6) 拙稿「P I S Δ型「読解力」に対応した国語科の授業―物語・文学教材を中心に―」(『島根大学大学院教育学研究科「現職短期1年コース」課題別研究成果集 第1巻(平成21年度)』P36～40)

(奥出雲町立馬木小学校教諭)